

灯台への「旅」、 その向「旅」へ

栗原憲一

海と灯台学ジャーナル編集長
一般社団法人日本海洋文化総合研究所理事
株式会社ジオ・ラボ代表取締役

灯台——。それは、地上の果てに立ち、海を見つめる「光の塔」である。その“光”は、航海する人々にとっての旅の「終着点」であり、同時に、彼らが日常生活へと戻る「出発点」のシンボルでもあった。

いわば、非日常と日常の“境界”を示す、「ランドマーク」ともいうべき存在だ。

近年では、GPSなどの発達により、かつての灯台の“光”の役割は、薄れつつある。しかし、灯台の“光”は、まだ、消えていない。むしろ、そこに新しい意味が、生まれようとしている。

「海と灯台プロジェクト」。かつて海の人々のためにあった灯台を、“海と人をつなぐ場”として捉え直す、新しい試みである。

灯台の足元にある地形や地質に目を向けると、何千万年、何億年という壮大な時間の先に、灯台が立っていることを知る。地域の歴史や文化をたどれば、灯台が、決して海の人々のものだけではなかったことに気づく。

そこには、灯台への「旅」という新しい“導き”が存在するのだ。

旅——。なぜ、人は「旅」をするのだろうか。生命の誕生はおよそ40億年前。その歩みは、海から陸へ、生きるために“境界”を越えた進化の歴史でもある。さらに、グレートジャーニーと呼ばれる、アフリカ大陸から“世界”を目指した人類の大移動は、海や山脈という“境界”を越えた。そこには、「未知への探究」があった。

灯台への「旅」——。それは、“境界”に立つ存在だからこそ、訪れた人に、その先の、新しい“景色”を見せてくれる場所。

灯台はもはや、「航路を照らすだけのもの」ではない。「人々の“探究心”を照らす、ランドマーク」へと進化しつつある。

海と陸、終着点と出発点、非日常と日常——。灯台は、あらゆる“境界”に立ちながら、時を越えて、人々の心に、静かな“光”を放ち続けている。



和歌山県・潮岬灯台

本州最南端にある地。天の川と交差するように、一条の光が海と陸をつなぐ。潮岬灯台へは、JR紀勢本線串本駅よりバスで17分。
photo: 福村成哉(南紀熊野ジオパークセンター)